

～骨髄異形成症候群MDSとは～

副院長 須賀原^{すがはら} 裕一^{ゆういち}

健診や人間ドックの際に血液検査を受けた結果、貧血であるとか、白血球や血小板の数が減っていると言われた方もいらっしゃると思います。

血液の中には赤血球、白血球、血小板という3種類の血球が浮かんでいます。

血球は、骨髄(骨の中の柔らかい組織)の中にある造血幹細胞から造られます。

血球にはそれぞれ寿命があるので、造血幹細胞が増殖を繰り返しながら、3種類に形を変えることで絶えず血液中に補充されています。

貧血は、通常の場合、鉄分やビタミンB12の不足が原因となって、赤血球の中のヘモグロビンの濃度が基準値よりも低くなった状態を指します。

しかし、骨髄異形成症候群という病気が原因で、異形成すなわち骨髄で血球を造る働きに異常が生じ、赤血球や白血球、血小板が血液中に十分補充されなくなるために、貧血になったり、白血球や血小板の数が減ってしまうという場合もあります。

異形成により造血幹細胞が異常に増殖し、がん化した白血球が造られ続けると、やがて白血病に

かわることがあります。ご高齢の方に多い病気で、大量の化学療法と造血幹細胞移植が唯一の治療法となりますが、治療に耐えるだけの体力が必要なため、実際には若い方でなければ用いられません。

そのため、これまでは輸血や感染症対策といった対症療法しかありませんでしたが、近年ではレナリドマイドやアザシチジンといったご高齢の患者さんでも用いられる治療薬が開発され、実際に使用されています。

アザシチジンによる治療の場合、白血病に変わるまでの期間を延ばせる、輸血の回数が減らせるといった効果のほか、普段の生活を続けながら、外来治療で受けられる(5日間の点滴を4週ごとに行うなど)といった利点もあります。効果が出るまでには個人差があり、半年や1年といった期間がかかる場合もありますが、対症療法しかなかった頃に比べ、予後の改善がみられています。

貧血、白血球や血小板の減少といった症状は、原因や治療法が様々ですので、血液内科の専門医の診察を受けることもご検討ください。